

影を追いかけて

～スーン・ヴァナラ氏へのオマージュ

私はこの数週間東京で、竹の棒を丁寧に削り、籐にヤスリをかけてきた。スーン・ヴァナラ（カンボジア、1962-）のアート作品に応答するものを作るために。自分なりにカンボジアの伝統凧である「カレンエク（Khleng Ek）」を制作することを決めてからは、2002年に福岡アジア美術館で行われた彼のワークショップの資料や、彼を知る人々から聞いたエピソードなどを参考にしてきた。凧の複雑な構造への理解が深まるとともに、凧は次第に形になっていく。それと同時に、自然資源、歴史、暮らしについてなど、私のカンボジアに対する洞察も深まっていった。

アート作品としての凧

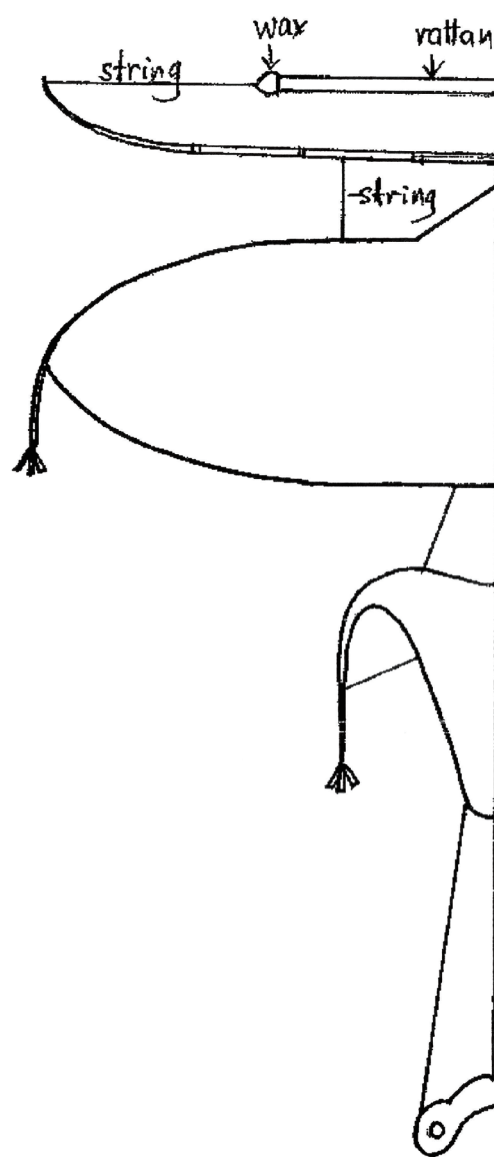
全ての発端は、昨夏の福岡アジア美術館のアーティスト・イン・レジデンスに参加した際に、ヴァナラ氏の作った2つの凧を鑑賞したことだった。当時、私は九州の凧文化についてのリサーチと並行して、目をモチーフにした凧の制作準備を始めたばかりだった。偶然にもヴァナラ氏の作品は、彼の凧のアイデアが生まれた美術館の一角にある交流スタジオにひっそりと保管されていた。

私はその存在感に感銘を受けた。どちらの凧も複雑な構造で、魅惑的な形をしている。それらは揚げるためのものではなく、室内に飾るために作られたものだった。このことがきっかけとなり、私はアート作品としての凧について考えを巡らすことになった。いろいろ知りたくなった。この形は何にもとづいているのだろうか、なぜ楽器が付いているのだろうか。一番気になったのは、彼が福岡で凧を作るようになった理由だった。こうした疑問を解く鍵を探すため、私はカレンエクの歴史を辿ることにした。

響き渡る凧の音

古代カンボジアの凧揚げの伝統は、アニミズム的な信仰や農耕儀礼と結びついた儀式的な意味を持っていて、紀元前400年頃までにさかのぼる。カレンエクは、上部に弓状の楽器をのせた楽器凧だ。クメール語で「カレン」とは凧のことで、同時に猛禽類の意味を持ち、大空を舞う自由を象徴する。また「エク」にはユニークと楽器の意味があり、まさにこの凧にうってつけの名前だ。次の年の収穫の見通しを占う手段として、日が暮れてから凧を揚げ、その音に耳を傾けることもあるそうだ。

時が経つにつれ、凧揚げの意義は農業の発展や信仰の変化とと



2002年に福岡アジア美術館で実施したワークショップ「タコカップ 2002」のためにヴァナラ氏が用意したカレンエクの図面。今回はこれをもとに制作した。

もに変わっていった。とりわけクメール・ルージュ政権が圧政を敷いた 70 年代頃には、凧揚げ禁止令まで出された。90 年代初頭には、文化的抑圧や地雷などの脅威のために、カンボジアの伝統的な凧作りは、ごく少数の高齢者しかできなくなっていた。しかし、1994 年以降、凧揚げフェスティバル、競技会、教育イベントなど、この伝統を守るための積極的な取り組みが始まった。カレンエクの復活は、平和の象徴であり、カンボジア人の文化的アイデンティティの形成にも繋がるなど、彼らにとって大きな文化的意義を持っている。



東京のスタジオで骨組みまで仕上げたところ

ヴァナラ氏の遺産

ヴァナラ氏の福岡アジア美術館でのレジデンス滞在から 20 年以上が経つが、今、私たちが彼の作品と再び対峙することは、継続する戦争や紛争という形で表出する政治的対立、環境問題、混乱などが起きている現状において重要な意味を持つのではないだろうか。凧は儀式に使われることもあれば、平和な時代には玩具として楽しまれるなど、さまざまな側面を持っている。しかし、私は凧が戦時中の攻撃に使われてきたという、軍事的な側面についても考えずにはいられない。

ヴァナラ氏は、福岡では自由を感じたと書き残している。創作だけに没頭できる環境が実験的な試みを後押しした。彼にとって、コラボレーションや彫刻的な凧作り、インスタレーション制作はまったく新しい試みだった。そして、彼が行ったワークショップは、凧の楽しさを共有するものだった。あまり多くを語らない人だったようだが、作品は力強く、平和への願いが込められている。

「あじびレジデンスの部屋 天空にはばたく凧～スーン・ヴァナラ」展のために制作している作品は、私が近年制作してきた「見つめる目」をモチーフにした凧の延長線上にある。この作品は、私の発見と探求の蓄積と痕跡の塊だ。ヴァナラ氏の実験的な精神と、共有体験への関心を反映して、一對の作品にした。私たちが凧を見たとき、凧は私たちがどのように見返すだろうか。

2023 年 12 月、東京
清水美帆

制作補助／野口竜平

謝辞／アレスデール・ダンカン、岩中可南子、オィヴィン・レンバーグ、清水章生、津田三朗、檜山寿美